

歴史は未来の羅針盤



これまで刊行しました、『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第八巻「史料編」は、教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中です。ぜひともお買い求めください。

『近江日野の歴史』第五回配本第八巻「史料編」は、昨年十一月に刊行されました。史料編では、日野町内に残された古文書や、日野にかかわる記録類を収録しています。今月から順次史料編の内容をご紹介します。まず「古代・中世編」の内容をご紹介します。

古代の日野

古代の史料は『日本書紀』や『万葉集』などから、鬼室集斯に関する記事や、天智天皇などの蒲生野の菟狘うすりがりの記事や和歌など、蒲生郡や日野に関する記事を掲載しています。史料編には多くの古文書が掲載されていますが、古代でも奈良時代以前の古文書は奈良の正倉院に残されているものなど、ごくわずかしか現存していません。そのため、古代の史料は歴史書などから掲載しています。

中世の史料は、古代の史料とは異なり、町内に残されている古文書から選んで掲載しています。まず、神社や寺院の古文書では、比都佐神社（十禅師）・馬見岡綿向神社（村井）、興敬寺（西大路）の古文書を掲載しています。主な内容は蒲生氏や土地、寺院の由緒に関する史料などです。

中世の日野

日野祭は、日野を代表する祭りのひとつで、古い歴史を持つています。史料編には日野祭に関する古文書を二点掲載しています。一点は天正八（一五八〇）年「綿向御神事次第」（馬見岡綿向神社文書）で、お渡りの行列を記録したものです。行列の先頭は小幣こへいで、猛僧もうそう（神宮寺の僧侶か）・芝田楽でんがく・大幣おほへい・神馬かま・神楽かぐら、西之宮神社（村井）神主かみ・滝之宮神社（村井）神主かみ・巫女みこ・馬見岡綿向神社神職かみ・比都佐神社神主といった神職、神輿みこしなどが続いていたことが書かれています。また、芝田楽は、現在は神調社の別称ですが、ここに書かれた芝田楽は実際に田楽を演じることを指すとも考えられています。芝田楽のあり方は現在とは違いますが、その起源が中世に

財となっています。

中世の綿向祭礼

さかのぼる可能性があることがわかります。

もう一点は、応永三十一（一四二四）年「ねこ田神主置文案」（比都佐神社文書）で、祭礼の馬を比都佐村が一匹献上し、祭礼の前には老人（村の代表者）が挨拶に行くことが定められた文書です。現在、馬見岡綿向神社の祭礼に比都佐神社や比都佐の人は関わっていませんが、中世には神主が神幸に加わったり、馬を出したりしていたことがわかる貴重な史料です。この二点の古文書は、日野祭の歴史をたどる手がかりとなるものです。

史料編は各巻の記述の元となる史料を中心に収録していますので、既刊の古代編や中世編ともあわせてご覧ください。



▲日野祭 神調社の宮入